

実践知の記述手法 -宮城県気仙沼市を対象とした大学生による復興支援活動を ケーススタディとして-

A Method of Describing Knowledge of practice - Case Study with Reconstruction support activity by the university student for Kesenuma-shi, Miyagi -

忽滑谷 春佳[†], 坂井田 瑠衣[†], 諏訪 正樹[‡]
Haruka Nukariya, Rui Sakaida, Masaki Suwa

[†]慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科, [‡]慶應義塾大学環境情報学部

[†]Graduate School of Media and Governance, Keio University

[‡]Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

nukariya@sfc.keio.ac.jp

Abstract

Knowledge of Practice is very situated and embodied. Even if it is the person, it is difficult to describe his/her knowledge of practice. In this study, on the basis of Phenomenological philosophy, we propose a method of describing it.

Keywords - knowledge of practice, reconstruction support activity, Kesenuma.

1. はじめに

実践の場における個人の“学び”を知として記述し他者に伝えることは容易ではない。実践的に活動している過程で自分が何を認知しているか、そこから何を知として自らの身体に落とし込んでいるのか。こうした学びのプロセスは、状況依存性と身体性に富む。ゆえに実践者本人ですら自身の学び得た実践知を言葉として記述し、他者に伝えることは難しい。

昨年の東日本大震災以降、多くの人々が被災地復興に向け、様々な復興支援活動を展開している。そうした活動の多くは、支援対象地域を具体的に限定し、対象地域の被災状況／地理／人口／経済状況／被災者のニーズに合わせて、既存の枠組みにとらわれない新しい活動を行っている。このような被災地に根差した構成的な仕組みづくりや活動は非常に実践的かつ暗黙的であり、彼らの活動や彼らのなかに蓄積されているであろう実践知を記述することは難しい。

しかしながら、再び襲ってくるかもしれぬ大

震災に備え、東日本大震災を体験した我々は、様々な被災地で起こっている復興支援活動そして活動を支える実践的かつ暗黙的な知をきちんと顕在化させ記述し、後世に伝えるべきである。こうした知の記述に関する問題は、単に数百年、数千年という大きな時間軸の上だけの問題ではない。3月11日の震災が残していった爪痕は大きく、被災地復興は長期化し、全ての被災地が復興するためには数十年かかるとも言われる。これまで被災復興に携わる人々は、自身は非被災者または非被災地の出身だという人が多く、いわば「外」からの復興支援が主流であった。しかし、真に復興を果たすためには外側からの一時的な支援ではなく、これからの被災地復興を担う現地の中高生など、住民参加型による「内」からの長期的復興の体制づくりが必要である。そうした将来起こりうるだろう内からの復興活動に向けて、まずは、これまで被災地で行われてきた「外」からの復興支援活動で培われた知を記述することは将来的に多いに有益だと我々は考える。

そこで、本研究では、第一、二著者が運営する慶應義塾大学諏訪正樹研究室による気仙沼復興支援プロジェクト「哲人-おとなりさんの哲学-」（以下、哲人プロジェクト）を「外」からの復興支援活動のケーススタディとする。哲人プロジェクトは気仙沼市のシビックプライドの醸成を目標とし気仙沼市内でのインタビュー活動を行う団体であ

る。本研究では、第一、二筆者ならびにプロジェクトメンバーを研究対象者とし、これまでのインタビュー活動を通じて、我々プロジェクトメンバーが学び、培ったインタビューに関する知を顕在化、記述する手法について議論する。顕在化手法としては、パタンランゲージ[1]や、まち観帖[2]、「もの」と「こと」の概念[3]を参考に、ボトムアップに実践的な知を顕在化する。知の記述手法について、現在進行形で活動している被災地支援団体をフィールドとして構成的に模索し提案することで、数多の被災地復興支援活動の知を埋もれさせず、後世に残すための手法確立を目指す。

2. 「もの」と「こと」

実践知の記述手法を模索するにあたり、我々は現象学哲学における「もの」と「こと」の概念を参照した。第三著者の諏訪は、スポーツ科学における身体知の探究方法論として、身体知を「もの」と「こと」の総体と捉えるべきだと主張する[4]。スポーツの世界では、現場の実践者(アスリート)は、「もの」としての自分のからだに解釈を与える。解釈とは、例えばなぜその動きが理にかなっているのかという理論付けや、目標設定などの意識付けである。解釈は一人称視点で主観的な「こと」である。「もの」が「こと」を生み、「こと」が「もの」としてのからだの制御やからだに関する発見を促す。身体知は「もの」と「こと」の相互作用総体から成立するのである[5]。

「もの」と「こと」という視点はスポーツ科学に限らず、本研究が取り上げるような実践的な活動における知にアプローチする上で、広く有効な手段だと我々は考える。まち観帖では「もの」と「こと」の視点から、研究者がまちを一人称的に記述し、彼らのまちに関する実践知を49の型ことばとして表現している。1章の冒頭でも述べたように、実践的に活動している過程で実践者自身が、活動の最中または事後的に、自分が何を認知しているか、すなわち、自身が置かれている環境において、自分はどのような物理的変数(「もの」)を知覚し、それらからどのような解釈(「こと」)

を生んでいるのかを、具に意識することは難しい。なかでも、ことばを伴う解釈(「こと」)は、後々回想することは比較的可能だが、その解釈が生まれた根源である物理的変数(「もの」)は、その多くを暗黙的に知覚しているがために、実践者本人であっても事後的に語ることは難しい。例えば、哲人プロジェクトのメンバーに、インタビューにおける実践知は何かと問うた際、「話しやすい雰囲気をつくる」という「こと」は簡単に言えるが、ではどのような「もの」が話しやすさを作り出すかと聞かれると、途端にことばに詰まってしまう。(例えば、この場合の「もの」としては、向かい合う相手との距離や方向、視線を置く位置、相槌のタイミングなどが挙げられるだろう。)

実践知を記述する上で、実践者が、自らが知覚した「もの」を具に語ることは、実践者の環境に対する認知プロセスを原始的かつ効果的に表す。そこで、本研究では「もの」と「こと」の概念を根底に据えることで、実践者の認知プロセスを曖昧にすることなく、実践知を記述する手法を模索する。

3. 慶應義塾大学気仙沼復興プロジェクト「哲人-おとなりさんの哲学-」

本研究で、ケーススタディの対象とした「哲人-おとなりさんの哲学-」は、2011年秋、慶應義塾大学諏訪正樹研究室で発足した大学院生2名、学部生2名による被災地復興支援プロジェクトである。哲人プロジェクトは2012年2月より、東日本大震災において被災した宮城県気仙沼市をフィールドとし、気仙沼市における地域コミュニティの再形成ならびにシビックプロライドの醸成を目的としてインタビュー活動を行っている。震災により、気仙沼市では人口の8割の方が職場を流され、従来の地域コミュニティを離れて、新たな土地で再起を図ることを余儀なくされている被災者も少なくない。彼らにとって、移転先での近隣の住民との関係性を再構築することは容易でなく、物理的には距離が近いものの精神的には距離が遠い。そうした状況の中で震災復興に向け、地域住

民同士が新たに繋がりをもつことが必要とされる。

そこで哲人プロジェクトでは、地域コミュニティの形成に際し商店主の果たす役割に注目し、彼らの仕事や地域に対する情熱、愛情、ひいては人生哲学について商店主へのインタビュー活動を行っている。併せて、インタビュー内容を地域住民と共有する仕組みをデザインし、地域住民が商店主の存在をより身近に感じるとともに、住民自らの地域への想いを再考するきっかけの提供を行っている。2012年9月時点では気仙沼市内の商店主8名のインタビューを完了している。

活動の特徴として、哲人プロジェクトは気仙沼市内の商店主へのインタビューを通じて、彼らの仕事や土地に対する人生哲学、すなわち暗黙的な知を顕在化させることを目指している。普段はあまりことばにしない人生哲学のような実践知をインタビュー者達に語っていただくために、プロジェクトメンバーは、みな毎回のインタビューの中で試行錯誤を重ね、インタビューに関する実践知を少なからず各々が蓄積し始めている。本研究では、プロジェクトメンバーのできたての実践知をまじり観帖、ならびに現象学哲学の観点に基づき記述する。

4. 実践知の記述手法

本研究では、哲人プロジェクトのメンバーである第一、二著者と学部生メンバー1名を対象とし、各々が築きつつある実践知の顕在化と記述を試みた。なお、本研究では、著者が実践知の記述において被験者を兼ねる。本手法はまじり観帖の手法を踏襲する。

これまでの自然科学のように「もの」と「こと」を分離せず、その相互作用に重きをおいてこそ、実践知の研究は意味を持つ。ゆえに、本研究では研究者が被験者を兼ね、内部観測的立場をとることで、より生活に根ざした実用的な手法を探る。

4.1 各自の体験を語り、言葉にする。

まず、プロジェクトメンバー3名が集まり1つ

相手の話にすくなくともいいから感想を言う／気まずいと思わせたら終わり／話を聞きながら次の質問を考える／質問は2つ以上考えておく／営業スマイルは不要／寄り添いすぎない／物切れの会話ではなく紡がれた会話をする／雑談にこそ良い話がある／相手が「うーん」となっている時は視線を外す／相手の発言をじっと待つ／相手からまだ発言がでるのかを見極める／相手にトーンを合わせる／時間軸を動かすより同一時間の中で話を広げる／話す時は相手の鼻を見る／使用する機材は相手の許可を得てから机に出す etc...

図1 65の実践知と思われる知見の一例

の机を囲む。互いがインタビュー中に留意している事柄について自由に語ってもらう。語っていくなかで、これは自分にとって活動を通じて構築された実践知だと思う知見を端的にポストイットに記述してもらう。今回の実践では計65の実践知と思われる知見を記述として得た(図1)。

4.2 実践知を「もの」レベルで記述する

65の知見を1つ1つ見ていくと、一人称視点で主観的な「こと」レベルでの記述が少なからず見られた(「脱線を受け入れる」,「相手のトーンに合わせる」等)。こうした「こと」レベルでの記述を、すべて「もの」レベルに修正する。

本研究における「もの」レベルの記述とは、以下の二つの基準を満たす記述とする。

- 物理的変数が具体的に言及されている。
- 動作または行為に関する記述である。

「もの」レベルの記述への書き換えを通じて、初めに得られた65の知見は、42に減少した(書き換え後の知見は表1に一部掲載)。これは1つの行為や動作(「もの」レベルの記述)が複数の「こと」を生み出したと考えられる。

4.3 「もの」レベルの記述を時系列に分類する。

次に我々は、「もの」レベルの記述に統一された知見を時系列で分類した。哲人プロジェクトのインタビュー活動は通常、訪問(事前準備)／プロジェクトの主旨説明／インタビュー／雑談／退出(事後活動)の5段階に分けられる。プロジェクトメンバーから得られたインタビューに関する知

見も、多くがこの 5 段階に応じた内容であった（複数の段階にまたがる知見も見受けられた）。

表1 「もの」と「こと」による実践知の記述の一例

時系列	「こと」	「もの」
訪問（事前）	環境を整える	雑音のある場を選ぶ／腕時計をする／利きの充電を必ず確認する
	プロジェクトの主旨を体現する	スーツでなく、カジュアルな服装で訪問する
主旨説明	安心できる場をつくる	機器は許可を得てから机に出す／ログを録るパソコンは膝に置く
	目的を共有する	プロジェクトの目的や活動内容は時間を取って丁寧に説明する
インタビュー	相手の話にきちんと反応する	相手の鼻に視線を合わせる／素直な気持ちを出す／「なるほど」を多用しない／知らないことは聞く
	話を深く掘り下げる	自分が聞きたいことを優先しない／相手の発言内容を拾う
	話を広げる	今話している話題に関係するのに出てこない変数を探す／話を聞きながら質問を2個以上考える
	公平な立ち位置をつくる	うなずきの頻度を調整する／話題に応じて表情を変える／笑顔は作らない
	考える間を担保する	相手の発言が出てくるまで待つ／沈黙を受け入れる／自分の視線をそらす
雑談	1時間のインタビューを成果として認める	発言内容がプロジェクト主旨と合致していることを伝える
退出（事後活動）	今後の関係を築く	今後の予定をもう一度伝える／気仙沼に訪れたら挨拶に行く／お礼状を出す

4.4 実践知を「こと」レベルで記述する.

5 段階の時系列に分類された「もの」レベルの知見を段階ごとに機能の違いで分類した。機能とは「相手の考える間（ま）を担保する」や「公平な立ち位置をつくる」、「話を深く掘り下げる」など、起きている現象の解釈であり、すなわち「こと」レベルの記述である。各段階の知見を機能（「こと」）で分類した結果、11 のクラスターを得た（表1）。

5. 実践知をエッセイで具に語る.

さらに、我々は「もの」レベルでの知見1つ1つをトピックとした短いエッセイ集を書き始めている。エッセイ集という物語媒体は、著者が生活のなかで得た小さな気づきやアイデアを短い文章で書き記したものの集合である。例えば、平松洋子氏の「買えない味」[6]は、食にまつわる2,3ページのエッセイ50個の集まりである。個々のエッセイは、各トピックに関する筆者の具体的な体験や考えしか与えてくれない。しかし50個すべてを読破すると、著者が“食”というものごとに抱く思想や問題意識等、筆者の料理に関する実践知が読者の心に降り積もるように伝わる。

特筆すべきは、平松洋子氏の「買えない味」はすべてのトピックが「豆皿」や「箸置き」、「野菜の皮とへた」など、すべて「もの」で構成されている点である。一方でいくつかのトピックをまとめた章題や各トピックの副題は「キレる力を！」や「豆皿-卓上に小さな宇宙を」といった具合に全てが「こと」で記されている。なぜ「買えない味」のようなエッセイ集という物語媒体が筆者の実践知を豊かに伝えるのか。我々は「もの」を基軸においた構成こそが豊かな表現の所以だと考える。

「もの」をトピックに据えることで読者は筆者の認知プロセス、すなわちどのような物理的変数を知覚しているのか、具体的な「もの」達とその全体像を把握し得る。それこそがエッセイ集の持つ表現力ではないかだろうか。そこで我々も表1の「もの」の項目に記された具体的な動作や行動を1つのトピックとしてエッセイを執筆している。

6. 手法の構成論的アプローチ

実践知を記述する方法のひとつとして、本研究ではパタンランゲージならびに現象学哲学の思想に着想を得て、「もの」と「こと」という物差しを用いることで、実践の場における実践者の認知プロセスに関する明瞭な言語化を試みた。人間はだれしも環境とのインタラクションを通じていくつかの物理的変数を知覚し、目の前の現象を一人称的に解釈、行動している。自分が何を知覚しているかについて意識を向けることがメタ認知であり、そうすることで、「もの」と「こと」の相互作用が活性化し、身体活動のスキル向上や感性の開拓が起こりうる。

本研究で提案した手法は、研究対象である哲人プロジェクトのメンバー達が築いてきた実践知を記述することにある面では成功したと言えるが、今回の手法によって彼らの実践知が全て記述されたとは言いがたい。もちろん現手法のさらなる精緻化は今後の課題である。だが一方で哲人プロジェクトの活動拠点である気仙沼市は刻一刻と復興に向かって変化を続けている。それに伴い哲人プロジェクトの活動内容も刻一刻と変化し、実践者であるメンバー達の実践知もまた同様に刻一刻と変化していくであろう。

実践の場は、実験室とは異なり、全ての要素が一時として同一ではいられない。ゆえに実践知を記述する手法も、環境の変化に応じて今後、柔軟に改良・修正されていくべきである。実践の場における研究は構成論的に行われなくてはならない。

東日本大震災で被災された全ての地域の復興にむけて、生活に根ざした構成論的な研究が多く興ることを望む。

参考文献

- [1] クリストファー・アレグザンダ, 平田翰那訳, (1984), “パタンランゲージ-環境設計の手引”, 鹿島出版会.
- [2] 諏訪正樹, 加藤文俊, "まち観帖: まちを観て体感し語るための方法論", 人工知能学会第9回身体知研究会, SKL-12-04, pp.16-21, 2012.

[3] 木村敏, (2005), “あいだ”, 筑摩文芸文庫.

[4] 諏訪正樹, 西山武繁, 高梨克也, 東山英治, 伝康晴, (2012), “スポーツと認知”, 2012年度日本認知科学会第29回大会発表論文

[5] 諏訪正樹, (2011), “学びのデザインの研究があるべき姿 - 「こと」のプロセスの事例探究”, 日本デザイン学会誌, デザイン学研究特集号「メタデザインへの挑戦」, Vol.18-1, No.69, pp.66-69.

[6] 平松洋子.(2009).買えない味.筑摩書房.